

人口とその徴候——優生学批判のために^①

宇城 輝人

進化論が人間ないし社会についての思想にあたえたインパクトのうちに「個体群思考 (population thinking)」という問題設定の成立を数えることができる。そこでごく素朴にポピュレーション (人口、集団、母集団) とはなにか、という問いを問うてみることはじめてみたい。この問いは射程の長い問いであり、種―個体、集団―個、社会―個人などの関係がどのようなものなのか、という問いにつながる。また次のような一群の問いへとただらかに広がっていく。ポピュレーションという実在があるとして、それはどのようにすれば捉えることができるのか。というよりも、そもそもポピュレーションとはどのような性質のものなのだろうか。そしてその構成要素であり、そのなかで生きていくよりほかはない個体なるものはどのような性質のものなのだろうか。そしてそのような枠組みのなかで人間の形象はどのような像を結ぶだろうか。

これらの問いに接近していけば、おのずから別の問題が視野に入ってくることになるだろう。それは優生学と

呼ばれる知のありかたについての問いである。優生学的発想には、ポピュレーションとそのメンバーの関係にかかわる諸問題を考えることが必須なのは明らかなのだから。したがって、尊敬すべき従兄チャールズ・ダーウィンの進化論から大きな刺激を受けて遺伝と種の改良を考えたフランシス・ゴルトンの理論的営為を再検討することは、直接に上記の問いを問い直すことであるだろう。

人類の改良という優生的発想が古いものであり、しばしば「夢」として語られてきたことは周知である。プラトンが『国家』のなかですでに語っていたような願望がことがらの背景をなしているとしても、そのこと自体は世紀転換期に「優生学」という名称のもとにいくつかの知や技術が縫り合わされ実践に向けて組織されるにいった、そのことの次第を説明しない。重要なのはおそらく人間の改良というイデオロギーそのものではなく、改良されるべき人間という対象の把握のしかたであり、そのための認識論的基盤である。そして、その認識論的基盤は、うえに掲げたわれわれの最初の問いの対象であるポピュレーションについての思考の展開のなかからやってくるだろう。

確認しておかなくてはならないが、ここではゴルトンの思想を「再評価」することは問題とならない。なるほど彼の発見した概念あるいは発明品のいくつかはいまやまったく必要不可欠な日常の一部と化しており、それを理解しなければわれわれの生活空間をうまく把握できないほどなのであって、その点だけをとつても充分にあらためて考察されるべきものである。だがそれは別の課題であり、ここで注目したいのは発明の才や、まして可能性の中心なのではない。

とはいえ、しばしばそうされることがあるように、「優生学の発明者」を理解するのにその偏執的な計測癖をいささか嘲笑的に喚起してことたりとしてはならない。それは迂闊とさえいふべきだ。グールドの『人間の測りまちがい』がその一例だといわなければならないのは残念なことだ。人種主義的言説の統計学的不適切さが中

心的な論点のひとつになっているぶんだけ、グールド自身の依拠するまさしくその統計学的視点そのものが優生学と同じところから発生したということへの意識の薄さが批判の力を殺いでいるように思われる。

優生学ないし優生運動の名のもとに行なわれてきたことを、いかなる名目のもとにであれ、もちろん許容することはできない。しかし、そうであるからこそ、優生学という名のもとに集積されてくる知や実践の回路のポテンシャルに切りこんでおくことがぜひとも必要なのではないか。そしてそのポテンシャルにおいて浮かび上がる相貌は、二〇世紀に世界中で行なわれたいわゆる優生運動のそれとはかなり異なるものであるかもしれない（優生運動については、本書所収の小林清一論文や米本ほか「二〇〇〇」を参照されたい）。だが、そうした振幅をはらむものとして優生学の思考回路を捉えるのでなければ、批判者さえもが知らず知らずのうちに浸っている優生学的深みを理解することはかなわないように思われるのである。

以下にみるように、ゴルトンには社会思想の進化論的変容の動きに鋭敏に反応してそれを表現し、ある時にはその流れを決定づけさえする。ゴルトンの知的営為はそうした広汎な運動の典型であり、そのかなめに位置するとみなすことができる。そうした聡明さに注目したのである。「ヴィクトリア朝の天才」の知的軌跡を導きの糸として、集合的なものと個的なものについての問題状況のひとつの見取り図を手に入れることができるのではないだろうか。われわれの著者がその知的営為の最初に未踏の西南アフリカの地にわけ入り、人類学的データを集集し地図を作成してきたように。われわれの興味は、だから別の側面からみれば、ゴルトンという要衝を足場にしてひとつの知的運動の素描を試みることである。

そうした思考の展開は、さしあたって統計と徴候走査のふたつの系において考察することができるように思われる。つまり、それらの系の交差する地点にゴルトンとその優生学は位置している。

一 統 計

遺伝のかたち

『種の起原』はキリスト教的 세계觀を打破する。だが、それはたんに固定觀念からの解放をもたすだけでなく、同時に新しい問題領域のはじまりをも意味する。ゴルトンにとってはそれはすなわち身体的なものと心的なものとの遺伝という問題であつた。動物について認められることがらを人間について否定することはいまやあまりに根拠薄弱だと思われた。自伝での回想を信じれば、「遺伝と人類の可能な改良という中心的主題のまわりに一群をなす」ゴルトンの問題の全体は一举に与えられた[Galton 1908: 288]。身体的なものと心的なものとの境界画定とそれらの連関。たとえば知力、衝動的情念への性向、子供への愛情、飼育化されやすい程度（黒人は飼育されやすい）。こうした現代的な問題が遺伝というテーマのもとに集約され切り拓かれた。

しかし、つぶさに考えてみると進化和遺伝がただちに直結する関係にあるのか、という点についてはゴルトンの直感はそのほど自明ではない。⁽³⁾むしろその不分明さを探っていくことが課題となるといふべきだ。そして、ここからは現在の視点から回顧して時代遅れの遺伝理論だけが生まれたのではない。

慎重な従兄にとつてはおそらくはた迷惑な敷衍であつたろうが、ゴルトンは進化論の明白な帰結として、心的なものは身体的なものと同じ法則に従つて遺伝するはずだと信じ、その法則がどのようなものか確かめようとする。『種の起原』からちょうど一〇年後の一八六九年に刊行された『遺伝的天才』はその最初のまとまった成果だった。一定の人口（たとえばイギリス国民）のなかに「天才」がどのように分布しているのか。その様相を明

らかにすることが主題となった。

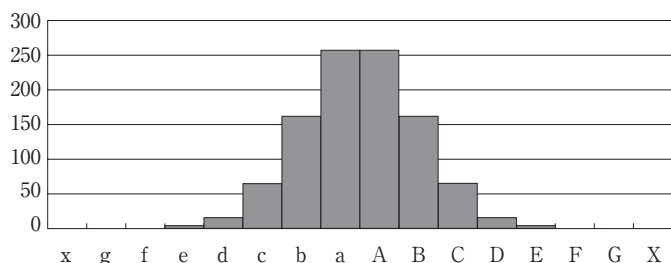
ただし、ここで問題にされる天才という言葉には少なからず注意が必要である。天才とは「自然的能力 (natural ability)」のことであり「熱意と困難な仕事に耐える素質と組み合わせた能力」を意味するにすぎない[Gallton 1892: 77-78; 邦訳上巻、七七―七八頁]。一八九二年の第二版への序章で回顧されているように「遺伝的天才」という題名は内容を適切に反映しているとはいいがたい。「この題名は誤解されやすいので、もしいま換えることができるなら『遺伝的能力』とすべきである」[Gallton 1892: 86; 邦訳上巻、「三頁」]。だから問題なのはいわゆるロマン主義的な天才ではなくて、さまざまな意味での有能さであり、あるいはこういつてよければ、人口全体の活力を規定する、人びとの多様な能力の総体である。人間の「天才」を探るべき領域は広汎にわたる。判事、政治家、将軍、作家、科学者、詩人、音楽家、画家、宗教家、ケンブリッジ大学の古典科目試験の成績優秀者、ボート選手、北部地方のレスリング選手。たしかにゴルトンは、天才という言葉をもちいながら、例外的なエリートと自然的能力の変異とのあいだで振幅を見せるけれども、だからといって短絡的に言葉のイメージに引きずられてはならない。著者はその程度には周到なのであって、注目すべき点はもつと別のところにある。

問題は分布であり、その分布の構造なのである。心的な能力が身体的な能力と同じように遺伝するというためには、人口のなかで心的な能力が身体的な能力と同じような分布を描いていることが示されればよい。じつさいのところ「イギリス人の最上位の知力と最下位の知力との隔たりは驚くべきものである。そこには人びとの窺い知ることのできない高さにはじまり、測りしれない深さにまで下がつていく自然的能力の連続がある」[Gallton 1892: 66; 邦訳上巻、六四頁]。その連続体の各部分(階級)の密度を測ること。これがある人種集団の遺伝の問題を構成する。

ところで、よく考えてみると奇妙なのだが、ゴルトンは『遺伝的天才』以来一貫して遺伝そのもののメカニズ

ムの解明に踏み込んでいこうとはしない。統計的記述に終始しているように見える。もっともメンデル説の再発見が一九〇〇年になってからのことだということもあるが、しかし、たんにそういう外的事情や、あるいはゴルトンが専門的な生物学者ではないというような限界によるという以外に、遺伝ということをつうじて狙われているのが生命体の再生産メカニズムそのものではないと考える必要がある。あるいは「人類の改良」を目指す操作・介入のために人口における個体的変異の分散の様相を把握したかったからだというべきではないか。換言すれば、生物学的と呼ばば呼ぶことのできるこの遺伝論は本質的に政治的な関心によつて支えられている。ポーターが「直喩」と呼んで指摘するように〔Porter 1986: 136〕、両者のすり合わせのなかに新しい思考の対象が生み出されつつあるのだといつてもよい。したがって、天才にせよ能力にせよ、現代的な視点からみた場合、生得的（生物学的）なものも獲得的（文化的）なものも絡まり合っているいは分節には、「氏か育ちか」というような分割線をめぐる論争的かつ理論的問題以上の含意があることに留意しておく必要がある。

そのような遺伝理論の参照軸となるのは、ケトレがすでに身体的なものの分布について確立していた「平均からの偏差」であった〔Galton 1882: 66; 邦訳上巻、六四頁〕。ケトレの二項分布（正規分布）図式がゴルトンの全体を根本的に規定しているということは周知のことからである。『時代の人物』なる人物名鑑から人口のなかに占める「天才」の割合を推計し、それを正規分布の法則に当てはめ、全体の様相を推定する。その結果、 g を最低とし、 a と A を中央において、 G を最高とする一四の階級からなるモデルが作られたのだった（図表1）。「拔群（*eminent*）」と呼ばれるに値する人びと、すなわち「まったく独創的な業績をなすか、世論の指導者としてであるか、どちらかによつてかなりの程度にわたつて名を上げている者」は一〇〇万人に約二五〇人の割合で存在する〔Galton 1892: 50-51; 邦訳上巻、四二―四三頁〕。これらの人びとは階級 F 、 G に相当する。この拔群のなかにはいっそう優れた「絶群（*illustrious*）」と呼ぶべき一〇〇万人に一人以下というごく少数の人間が存在す



100万人あたりの推定数、縦軸は千人単位。[Galton 1892: 75; 邦訳上巻、七三頁]より作成。詳細は下表のとおり（単位は人）。

A, a	256,751	B, b	161,279	C, c	63,563	D, d	15,696
E, e	2,423	F, f	233	G, g	14	X, x	1

図表 1 能力にもとづく人口分布

る。絶群の人間は上のモデルでは一四の階級の外側に階級Xとしておかれている。「彼らの死ぬときには国民のなかの教養ある階層の全部がこれを悲しみ、そのため公の葬儀が行われるか、あるいは行われてしかるべきであるような人物、ないし将来歴史に残る人物である」[Galton 1892: 53; 邦訳上巻、四六頁]。

また中央の六つの階級（c、b、a、A、B、C）に属する人口の九五%を占める部分は「平凡（mediocre）」と呼ばれる。平凡というのは「おおむね地方の集会などで見受けられる人物の知的能力の水準」のことだという。「なぜならば首都やその他の都会にあるいっそう活動的な生活の魅力によって、しばしば有能な階級が地方から離れ、一方低能や白痴は集会には顔を出さないのだから。したがって地方の小さな街の普通の社交社会の大部分を占める残余のものは、ほぼ純粋な平凡人である」[Galton 1892: 74-76; 邦訳上巻、七四—七五頁]。

いまとなつては近似的推計と呼ぶことさえはばかられる乱暴な議論だといわなければならない。しかしながら、このモデルが実態をどれほど正確に表象しているかはじつは二次的な問題なのだともいう必要がある。著者自身はつきり自覚しているように「この主題を統計的に取り扱ったこと、数字的な結果を出したこと、「平均からの偏差の法則」を遺伝についての議論に導入したことについては、私が最初である」[Galton 1892: 24; 邦訳上巻、一〇頁]という

この意味は大きい。それまで掴みどころのなかったものが計量化されることで、はっきりとした構造を備えた実在となりつつあるのだから。正確さの問題はその後にでてくるものである。

人口という問題

だが、身体形質にせよ天才（心的能力）にせよ、正規分布する人口という図式だけでは集団の存立をうまく説明できないように思われる。すなわち、正規分布する構成員からなる人口というものは当然ながら個体間に差異が発生することを前提にするけれども、とすれば、変異の累積によって集団（種）のまとまりが発散してしまわないだろうか、という問題が提起される。たとえば、背の高い親から背の高い子が生まれ、背の低い親から背の低い子が生まれるのであれば、世代を経るごとにその傾向がますます助長され、背の高い集団と背の低い集団の懸隔が限りなく広がってしまわないだろうか。あるいは別の表現をすれば、人口というものがたまさかの寄せ集めでないならば、そのような発散傾向が持続的に働いているということはそのも人口の集合的性格の成立する余地そのものを失わせてしまわないだろうか。あえていえば「秩序」が成り立たなくなってしまうのだろうか。変異の累積によって種の進化が可能になるということが進化論の根幹である以上、これらの問題は本質的な問題だといわなくてはならない。

進化論は種というまとまりを根本的に相対化してしまったけれども、しかし種というまとまりが存在するという直感是否定しがたい。しかも、ことがらを生物学的種に限定せず、国民や、あるいはある特定の家系といった人間にかかわる人口現象に重ねて考える場合、ますます集合的なまとまりは否定しがたく見えるだろう。そもそも「遺伝」なる現象が存在するのなら、伝達されるべき不変の同一性がなければならぬ。そうした同一性を通時のおよび共時的な変異や進化と整合的に説明しなくてはならない。

また逆に、人口が収斂していかないだろうかという問題もあるだろう。

明らかなのは一〇〇人の大男は次の世代に自分たちと同じだけの人数を残さないということである。他方で一〇〇人の中くらいの人間は、より多産で、同じような子孫を多く生みだし、困難を生き抜くのはいっそう適応しているので、次の世代に自分たち以上の割合の子孫を残すだろう。そこから予期されるのは、第一世代よりも第二世代においては大男はいっそう少なく、中くらいの人間はいっそう多いということである。しかしじつさいには大男も中くらいの人間も第二世代に以前と同じ割合で見られない。したがって問いは次のようなものだ。一般的にいつて各個人が自分と同じような子孫を残さないにもかかわらず、後続の諸世代が一般的なそのすべての特徴においてかなりの正確さで互いに似通っているのはどのようにしてであるのか。[Gallton 1877 a: 492]

このような問題は身体形質だけでなく心的能力にもあてはまる。『遺伝的天才』以来、天才家系にしばしば断絶傾向が見られるということが主要な論点のひとつをなしている。世代を重ねていくにつれて起こるはずの均質化が起らないのはなぜかという、この問題は優生学的なモチーフに一定の色調を与えるだろう。平凡へと収斂していかない人口は、では通時的かつ共時的にどのような軌跡を描くのだろうか。当時の一般的イデオロギーそのものであるが、人口が退化していくのではないかということをゴルトン⁽⁴⁾は危惧する。またその一方で、優れた天才が消滅してしまうことはなく、またその増加を促すこともできるという信念をいだいてもいるのだった。

したがって、遺伝と人類の可能な改良を考えるためにはケトレの正規分布図式は思いのほか適合的な枠組みではないというべきかもしれない。よく知られているように、ケトレにあつては、正規分布は究極的には平均値によって集約される。個々の計測値、観測値、すなわち個体表象は「平均からの誤差」であり、それらはすべて平

均値へと絶えず漸近していくのであり、最終的にはひとつに融合するようなものである。一言でいってしまえば、正規分布の統計的世界は逆説的なことに、無数の粒子のマスから成り立っているというよりは、むしろ平均人と(5)いった単一の理念的個体によって支えられている。その個体は平均と同時に理想を体现する。そこから個々の個体の変異や親子関係を価値づけたり予測したりする視点を導き出すのは容易ではない。

だから、ケトレ的な視点に立つだけでは、たとえば次のような個体把握にかかわるヴィジョンを具体的に操作化する手だてを考えるのは難しいだろう。『遺伝的天才』ですではつきりと主張されている優生学的視点から見ると、人口のなかで注目すべきなのは拔群（および絶群）の部分でも、あるいはその反対側の「低能」の部分でもなく、さらには大多数を占める平凡の部分でさえもなく、C、D、Eの階級である。イギリスのような古い文明社会においては、

とくに階級C、D、Eの人びとは不利な事情におかれる——彼らはかなりの自己抑制と努力をしなければ将来の幸運を保証されていない人びとだ。彼らは早くから足手まといとなる妻をもつと、成功して社会の上層に立つことはほとんど不可能となる。階級F、Gの人びとの場合そのように拘束されないが、彼らの数は多くないため〔……〕全体としての国民の水準におよぼす効果はずっと少ない。[Galton 1892: 414; 邦訳下巻、

二三五頁]

ようするに拔群でも平凡でもない三つの階級の繁殖力の抑制が人口全体にとつての損失の大きな部分をなしているというのだ。そのせいで「種族は高度な文明の外観だけは保つけれども、世代を経るごとに高度な文明に不適なものとなり、次第にその質を低下させていき、ついには政治的・社会的機構の全体が瓦解し、多かれ少なかれ野蛮状態に舞い戻ってしまうような時代がくることになる」[Galton 1892: 415; 邦訳下巻、二二六頁]。あらため

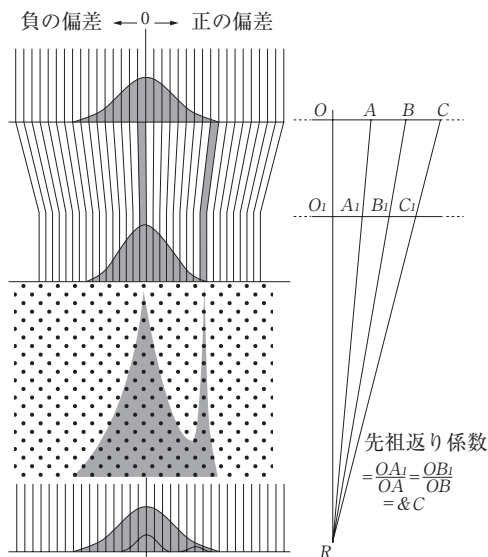
て確認されるのは、人口の世代間の変動メカニズムを明らかにしなければならないことである。そしてそれは遺伝にかかわるメカニズムであると同時に人口統治のためのメカニズムでもあるだろう。

先祖返りから回帰へ

集団の遺伝現象についての思考は、スウィートピーをもちいた実験（一八七四―七六年）と人体測定研究所（四年の国際保健博覧会にさいし設置され、博覧会終了後も八九年まで継続した）でのデータ収集をつうじて練り上げられていった。ちなみに人体測定は七四年にすでにパブリックスクールの生徒を対象として実施している[Gallton 1874 a, 1874 b; Fergus and Rodwell 1874]。

スウィートピーの実験を簡単に説明すればこうだ。まず豆の大きさ別にスウィートピーを七つにグループ分けし、それぞれのグループの豆をグループを越えて交雑しないよう注意しながら栽培する。そうして収穫された子世代の豆の大きさを親グループごとに測定する[Gallton 1889: 79–83, 225–226]。結果は単純化していえば次のようなものだ。全般的傾向としては大きい親グループから大きい子が、小さい親グループからは小さい子が生まれるけれども、平均値としては大きい親グループから生まれた子は親よりも小さく、小さい親グループから生まれた子は親よりも大きくなる。そして全グループの総体でみると親世代と子世代は、ほとんど同じ正規分布を描く。つまり、全体における個体の変異の分布という面で見ると、親世代と子世代は同じであって、集団の特徴が世代を重ねるにつれて発散も収斂もすることはない、ということになる。⁽⁶⁾このようにしてえられた結果は、たとえば次のように解釈される。

ひとつの系統にかかわる過程とは、家族の変異と先祖返りの過程である。〔……〕家族の変異とは、同一の、



[Galton 1877 a : 493] より作成。

図表 2 世代の再生産モデル

あるいは類似した家族の子たちが、自分たち全員の理想的平均類型から逸れていくことを意味する。先祖返りとは、その理想的平均類型がおおよそではあるが十分に平均的な祖型と記述されるものへと「先祖返り」して親の類型から逸れていく傾向のことである。ひとつの系統において家族の変異が唯一の過程であつたならば、種族の分散は世代を重ねるにつれて無限に増大しただろう。しかし先祖返りがその増大を抑制し（「…」停止させるのである。[Galton 1877 a : 513]

つまり人口の運動について次のふたつの結論がえられたことになる。分散の全体的布置状況は世代をつうじて変化しないこと。そして、正規分布の両極から中央へ向けて「平均値における」移動圧力が働いていること。ゴルトンは、これを世代の再生産にともなう変異傾向と、それと同時に作用する先祖返り傾向との均衡によって説明しようとする。これはパチンコ台とよく似たクインカンクスという装置を用いた卓抜なモデルによって模式化されている（図表2）。このモデルでは、パチンコ台と同じように釘の打たれた領域は変異の作用を表現しており、その領域の上に描かれている中央に向けて収斂するように溝の打つてある領域は先祖返り傾向を表現している。ふ

たつの領域を通過して装置の底に現われる子世代は、図の最上段にある親世代と同じ正規分布を描くことになる。このような均衡図式は、外観としては不変だが内部で流動するマスとしての人口現象を見るための一定の視点を、まずは提供する。

ところが、このような見かたは一般的な生物学的視点から大きく逸れていつていると指摘しておかなくてはならない。つまり遺伝を論じながら、強い意味での遺伝の問題から逸脱していつているように思われるのである。あるいは遺伝という現象を見る視点が根本から変化しているというべきか。それは「先祖返り (reversion)」の位置づけの問題である。いうまでもなく一般的な用法で先祖返りとは「長期間失われていた構造が呼びもどされて存在するようになる」現象であり、たとえば『人間の由来』のダーウィンによれば、人間が「なんらかのもつと下等な種から由来」したことの徴とされる。

小頭性白痴の単純な脳は類人猿の脳に似ているから先祖返りの例だといってもよいだろう。いま問題にしている主題「先祖返り」に、もつとしつくりと当てはまる別の例がある。人間が属しているグループの、より下等な成員「類人猿」にかならず見られるいくつかの構造が、ときとして人間に現れることがある。しかし、正常な人間の胎児には発見できない。または、もしもそれらは人間の胎児に正常に見られるものだとすると、異常な発達を見せるのである。もつともそれは、このグループのもつと下等な仲間では正常な状態なのではあるが。〔ダーウィン 一九七九、九八頁〕

しかしこうした考えかたとは対照的にゴルトンは先祖返りに、いわば種の同一性を保守する機能を担わせたのであり、のちには「種族の中心への回帰」〔Galton 1882: 33; 邦訳上巻、二二頁〕とさえ呼ぶ。それは右の引用文に見られるような現生種（正常）に太古の絶滅種（異常）が闖入すること、なのではない。ゴルトンの先祖返りは、

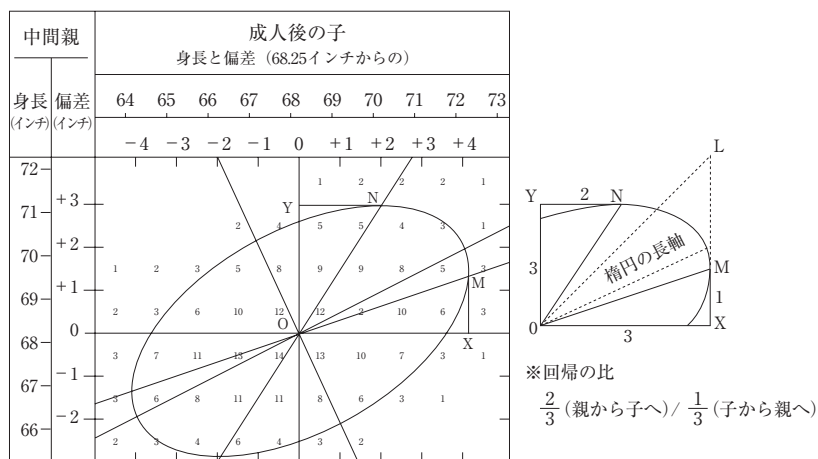
かつてどこかにあったものを目指すのではなく、今ここにある集団（種、人口）の中心（正常）を目指すのである。ただ、個々の個体がそのような動きを見せるということではなくて、集団の平均値において、その運動は起こるのだが。ともかく、先祖返りということで指し示されるものが、現在から見ればもはや異物のように見える過去といったものから、むしろ未来において実現される集団的アイデンティティの潜勢性へと変化しているということが出来る。すでに概念はその内容を越えた別のものを意味しようとしている。この飛躍は、生物学的な概念が統計を経由して社会的なものへと重ね合わされていく瞬間を表しているように思われる。

もうひとつ問題がある。くだんの均衡はマスの次元にはじめて現われるのであり、大数の法則（中心極限定理）に多くを依存して成り立っている。けれどもハッキングが指摘するように「微小な独立した影響力」の集積として貫徹される法則は「聞こえはよいけれども概念として一貫性を欠く」[Hacking 1990: 185]。それは事象（過去、現在、未来の）をよく記述するけれどもメカニズムの説明ではない。別のいいかたをすれば、人口を構成し、また人口の効果として現われる個々の個体のはらむ意味の理解をもたらない。たとえば、

ある個人が高度な性質を自然に備えているという事実は、彼が劣った種族の優れた一員であるか、あるいは優れた種族の平均的な一員であるかのいずれかであるだろう。出自のちがいは彼の子孫において露呈するだろう。子孫はその種族の類型の中心点へ向けて先祖返りするのだから、前者の場合は退化するが、後者の場合はそうではない。これらふたつの事例は理論的に区別されるけれども現実においては混在している（……）。

[Galton 1883: 305]

といった現実をうまく捉えることができない。ようするに均衡図式では人口を強い意味で掌握することはできない。



[Galton 1885]より作成。

図表3 親と子の身長を変数とする度数分布

概念の内容における飛躍は正しい名前と呼ばれることをもって完成する。人体測定研究所で収集した一万人に近いデータを中心に検討（おもに身長）することによって、一八八五年には先祖返りの概念は「回帰 (regression)」へと練り上げられる。⁽⁸⁾ 自伝によれば、ある朝ケンツラムズゲイトの近くの駅で列車を待ちながら、親の身長と子の身長を変数とする度数分布表を倦かず眺めていて、等度数線が同心楕円を描いている、ということに気づいたのだった（図表3）。ここであえた直感をもとにして「表全体の結果を単一の公式で表現する方法」を見いだした[Galton 1908: 302]。もし子が親とまったく同じ特徴を備えていれば（完全に同一物の再生産であれば）、それは完全相関ということになり、表上の等度数線は同心楕円を描かずに、四五度右上がりの直線に収束するだろう。それが楕円になるということは、そのぶんだけどの親子関係にも一様な偏りが働いているということになる。つまり人口全体に一樣に「回帰」が働いているということを意味するだろう。数理統計学のはじまりを告げるこの概念は分散全体を制御する力を表現しており、先

にふれた均衡するふたつの力をひとつに統合するのである。

個体群である人口は分布の外観を変えることなく内部で変動し対流する。平凡人の圧倒的群集がつねに変わらず存在する一方で、「天才」はかならず生まれてくる。だが天才は、天才の家系から連綿と生じてくるということとはあまりないばかりか、逆に断絶傾向が著しく、また生まれたとしても子孫は親たちほど優秀でないことが多い。つまりその家系は圧倒的多数の群集のなかにいづれ埋没していく。新しい天才はむしろその群集の別の箇所からやってくる。そして「種族の中心」はその群集の内奥にあるだろう。またすでに触れたように、おそらくこのような動きの鍵を握っているのは人口のうちの抜群でも平凡でもない部分だということになるだろう。

もちろん回帰の概念からこうした考えかたを導くのは厳密な統計学の理解から逸脱しているかもしれない。だがここまで記述してきたことから理解されるように、この概念はケトレ的な統計概念を純粹に数学的に練り上げ発展させていくことによって獲得されたものとはいえない。そうではなくて人類改良のための足がかりを築くために、人口の運動メカニズムという高度に社会学的な対象を画定するという関心のなかから生みだされたのだった。

このような枠組みのなかでは、個体のはらむ意味あるいは個体と集団の関係は大きく変化していかざるをえない。個体のレベルを超越する「全体的なもの」とか、あるいは反対に絶対的な原点としての「個体的なもの」というようなものはやはりあまり意味をなさなくなる。そこにはマス現象があるだけだ。いわばケトレ的な全体という呪縛から個体（標本）を解き放ち、個体（標本）から出発して全体（集団）を推定したり決定したりできるようになったのだった。

回帰は集団の分散全体を制御する力であり、個体の運動によって実現されるという意味において、個体に内在する傾向性だといえよう。だから別の視点からいえば、回帰が表現するのは集団にとっての個体の生みだす子孫

の価値であり、個体のなしうる行為総体の価値である。一言でいえばそれは個体をつうじて見えてくる集団の潜勢性なのだ。個体はもはや集団のなかにおかれてはじめて意味をもつものにほかならず、また集団は潜勢的全体として個体のなかに折り畳まれてしまう。

さらにいえば例外、異常、病理といった言葉で、集団の周縁に位置する個体群を指示する必要もなくなっていく。全体が単一の定式でくまなく規定されうるのだから。例外、異常、病理は、特定の個体を指示するのではなく、集団そのものの全体に内在し、かつ遍在する傾向性を意味するようになり、同時にすべての個体にそなわる内的な傾向性を意味するようになる。その集団に属するどの個体も、その位置におうじて、ある蓋然性をもって正常であり、同時にまた病理的だと規定されるだろう。ことは「天才」にも同じくあてはまるだろう。最初の企図からすれば半ば逆説的であるが、ゴルトンはこうして天才の真実を人口のなかに見いだしたのだった。

個的実在でも全体的実在でもない水準の実定性。人口はたんなる経験論的水準を越え出るリアリティを獲得しつつあるように思われる。

二 写 真

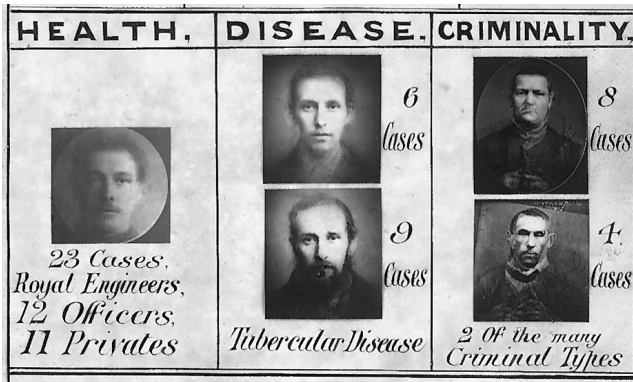
重ねること

統計学の概念の革新と一体化したかたちで、個体と集団の関係についての思考は大きく変容していくのであった。そこでは個体という実体は単一不可分の原子であることを止めるのであり、もはや個体それ自体は注視の単位ではなくなるだろう。だが個体という経験論的なレファレントが不要になるのではない。個体は徴候の観察が

展開される場となるだろう。そのかぎりではむしろ個体の重要性は増すといえるかもしれない。もちろんこうした方向性をゴルトンが最初に示したというのではない。よく知られているように一九世紀後半以降の人文・社会科学の分野においてそうした見かたは一大潮流をなしている。ゴルトンはその潮流に属しているにすぎない。とりたてて検討するに値するのは、われわれの発明の才人が『人間と動物の感情表現』（二八七二年）におけるダーウィンの手法を引き継ぐかのように、ここでも新しい分析装置を導入したという点である。

人間の心的能力の遺伝と分布を解明することがゴルトンのテーマだというのは前節で示したとおりである。だが、心的能力を測定するという発想は思いつかれたばかりであり、そのための手段などあろうはずもなかった。そうしたなか、監獄総監デューケン卿から提供された既決囚たちの写真が都合のよい糸口となった。「さまざまな犯罪と結びつく容貌の類型を発見し定義」するよう要請をうけたのである〔Galton 1908: 259〕。犯罪者集団は、悪徳に傾く本能、劣った知力、自制心の欠如など心的能力のありようを、正常人から区別できるかたちで外見に表しているにちがいない。「ほとんどの点でよく似ているけれども細部では異なっている何人かの人びとの肖像画が写真が手に入ったとして、そこから典型的な特質を抜き出す確実な方法はなにか」〔Galton 1883: 340〕という課題をゴルトンが人類学協会に提起した一八七七年は、前節で検討した統計概念の発明のさなかにあたる。この時期は、ガル以来の骨相学が説得力をもつ時代でもあった。⁽⁹⁾

ところで、このような着想には、すでにいくとおりかの試みがなされていた。ハーバート・スペンサーは画像をトレーシングペーパーに写し取り、それらを重ねたものを光にかざして見ることを試みていた。またステレオスコープ（立体鏡）を転用して二枚の画像を重ね合わせる方法も知られていた。だが容易に想像がつくように、これらの方法には数多くの画像を重ねることができない憾みがある。ゴルトンの考案した「合成肖像」の手法によれば、多くの画像を重ねても比較的鮮明な像をえることができる。原理的には次のような仕組みである〔Galton



[Galton 1883]

図表 4 合成肖像

1883: 8-19, 339-363]。何枚かの同じ縮尺の肖像を、目の位置が重なるように束ねてピンで板に固定し、その束と正対するようにカメラを設置する。束ねた被写体を一枚ずつ次々と同じ時間だけ露光させていけば（画像を取り替えているあいだレンズは閉じられている）、一枚の印画紙のうえに肖像のすべてが等しい濃度で合成され、単一の像に定着する。また後には、光学的工夫によって被写体を束にすることなく並置して合成する装置が実用化されている。

したがって合成肖像は「類型の肖像であって、だれか個人の肖像ではない」。それは「なんらかの所与の人間集団の平均的特徴をもつ架空の形象を描きだす図像」[Galton 1883: 340-341]にある（図表4）。

混ぜ合わされた肖像の実例を見せよう。それらは、ハクスリー教授の適切な言い回しによれば、正しく「類的（generic）」肖像と名づけることもできただろう。類的という言葉は類の存在を前提とする。すなわち多くのものを共有しており、極端な特性よりは中間的な特性をいっそう頻繁に現わす個体群の存在を。同じ考えはときに「典型的」という言葉によって表現される。これはケトレによってよく用いられた言葉である。ケトレはこの言葉に厳密な解釈を与えた最初の人物であり、ケトレの典型的

観念は彼の統計的視点の基礎をなしている。[……]多くの異なる肖像が単一の肖像に融合するとき、その結果はぼやけた染みにすぎないと思われるかもしれない。しかし平凡な特徴が極端な特徴よりも圧倒的に支配的な条件のもとではそのようなことはけっして起こらない。そこでは多くの共通する特徴がたがいに結合し強めあうので、それらの特徴が優勢になり、それ以外の特徴を排除してしまう。あらゆる共通なもののは残存し、あらゆる個別なものは消滅するようになる。[Gallon 1883: 350]

このように、こゝでも出発点を提供するのにはケトルである。「合成肖像は画像的平均を獲得する手段を提供する」[Gallon 1883: 361]。合成肖像は明らかに、「平均人」が狙っていたものと同じものを画像化し可視化しようという意図にもとづいている、とひとまずはいうことができる。

当局から提供された既決囚の写真は、殺人や強盗などの粗暴犯、詐欺などの知能犯、そして性犯罪者の三つのカテゴリーに分類され、それぞれのカテゴリーについて合成肖像が作成された。ゴルトンはその肖像を比較考量した結果、「特定の自然的階級が姿を表し出した。そのうちのあるものはきわめて目立った特徴」を示しており、したがって「犯罪者の三つのグループは大いに異なった比率で異なる観相学的グループに所属する」ということを発見する[Gallon 1877 b: 316]。粗暴犯の合成肖像からはふたつの顔の類型が特筆されるべきものである。「ひとつは、ヘンリー八世のように大きな顔立ちでありながらいぶん小さな頭蓋をしている。他方は[……]弱々しいもので明らかに一般的なイギリス人の顔ではない顔である」[Gallon 1883: 352-353]。発明者の述べるところによれば、合成写真は犯罪者の典型をさぐる作業のほかに、民族学的調査や病の観相学、さらには家族的類似や最良の職業労働者の像を明示するといった用途に応用が期待できそうだ[Gallon 1883: 362]。

人間の外観は内面の反映であり、その外観を写した画像を重ねていくこと。そこからは、個人によってまった

く異なる環境要因とか育ちといった夾雑物が取り去られた純粹な心的能力が姿を現わす。合成肖像という装置をつうじて特定の心的能力と身体形質の相関を特定し、心的能力が人口のなかに通時的かつ共時的にどのような分布しているのか解明していく手がかりがえられるはずだった。たとえば純粹な犯罪者の像。それは発見というよりはイデオロギー的欲望の再認であるが、むしろそれだけにいつそう広汎な注目を喚起するポテンシャルを秘めているはずだった。だがじつさいには発明者の期待どおりの反響がえられることはなく、報告を聴いた人びとは失望さえ覚えたようだった。というのもゴルトン自身も認めるように、

既決囚の多様な集団について作成した合成写真は、積極的というよりは消極的な意味で興味深い。合成写真が生み出す顔は中庸の人相となっており、そのうえには極悪非道の徴は刻まれていない。個々の顔は充分に極悪非道なのだが、それらはちがう方向に極悪非道なのである。だからそれらの顔が結合される場合、個々の特徴は消滅してしまい、残されるのは劣った類型に共通の人間性だけである。[Galton 1863: 15]

なるほど、聴衆は「ドリアン・グレイの肖像」のようなものを期待していたのかもしれない。眉目秀麗なドリアン¹の度重なる悪行の痕跡を本人に代わって引き受けた結果「老けやつれ、皺だらけで、見るからに厭わしい容貌」となってしまった肖像画のような、「罪悪による墮落の歴然たる象徴」といったものを「ワイルド 一九六七、三一九、一四三頁」。しかし、合成された肖像を一瞥すればだれもがそういう感想を禁じえないように、合成されて現われた容貌はとくに「極悪非道の徴」が刻まれているようには見えず、むしろ「中庸の人相」をしている。ゴルトンは平均人に美の典型を見たケトレに忠実といえなくもない口ぶり²で、「たくさんの人物の平均的肖像は、彼ら一人ひとりの外見をいろいろな意味で損なう欠陥を免れている」がゆえに、「あらゆる合成肖像はその元になった人物たちよりも見かけがよい」とゆえにも述べている[Galton 1863: 343]。

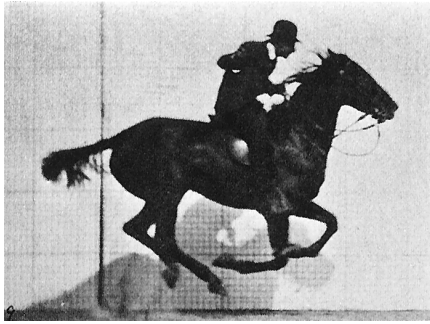
われわれの発明家は、評判の芳しくない発明品にいつまでも拘泥しなければならぬ発想に乏しい人物ではなかった。彼の興味は数年もしないうちに、やはりデューケイン卿の援助のもとで指紋による個体識別法へと移っていき、アルフォンス・ベルティヨンの人体測定と写真を組み合わせた複雑な個体識別法（渡辺「一九九三」を参照）の批判に着手する。そして、指紋による個体識別法はロンドン警視庁に採用されるのを皮切りに大成功を収めるだろう。だが、いまは指紋のことは置いておこう。合成肖像にはいまだ少し繊細な注視に値する像が定着されているというのは確かである。

可視化すること

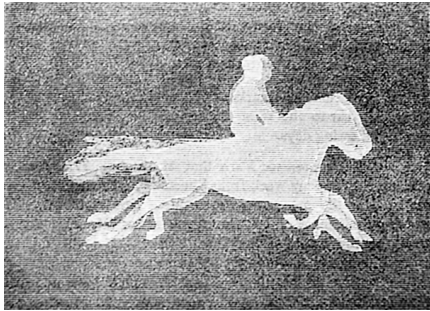
写真に写された肖像を重ねていって、そこに現われる像はなにを意味しているのだろうか。あるいはこの画像はなにを可視化するのか。あらためてこの単純な問いを問うてみなければならないようだ。発明者ゴルトン合成肖像を「画像による統計の一種」と形容した後につづけて、いささか矛盾をきたすように見えるかもしれないけれども、こうも述べている。

合成写真はしかし平均以上のものだ。それはむしろ、膨大な統計表の等価物なのである。標本数で除されれば統計表の総体は決算欄に平均値を示す。けれども合成写真は真の全体化である。なぜなら、それは考慮の対象である素材の全体をふくんでいるのだから。[Galton 1883:353]

「素材の全体をふくむ」画像、すなわち「全体化」された肖像というのはどういう意味だろうか。おそらく、この視覚表象にかかわる意味の全体を理解するためには、当時の先端技術である写真という技術の喚起する問題をもう少し広い視野において検討してみる必要がある。



マイブリッジの連続写真の一コマ [Muybridge 1985]



ゴルトンによる合成 [Galton 1882: 229]

図表5 ギャロップで走る馬

写真技術は視覚表象に一大転換をもたらしたということは周知の事実である。エドワード・マイブリッジが一八七八年に公表したギャロップで走る馬の連続写真は、そうした変容のはじまりをよく表している。写真史におけるあまりにも名高い挿話の詳述はひかえるが、この連続写真は疾駆しているときに馬の脚が本当に四本すべて同時に地面から離れるのかどうか確かめたいという前カリフォルニア州知事スタンフォードの依頼により、その牧場にて撮影されたものである。結局、四本の脚すべてが宙に浮いている瞬間が写真に捉えられたのだが、しかし意外なことには、その瞬間に四肢は前後脚を外側に伸展するのではなく、逆に内側に屈曲することまで明らかにになった(図表5上)。それまで疾駆する馬が地面から完全に離れるとすれば、そのときには四肢を外側に伸しているものと了解され、そのように描かれてきただけに、捉えられた馬の姿は少なからず驚きをもたらす真実だった。だがこの発見は

慣習的誤りから科学的真理への脱却とのみ理解されてはならない。明敏なゴルトンはこのような慣習的表象と実体との齟齬のなかにひとつの問題領域が拓かれつつあると気づき、合成写真の技法をもちいてそれを探った。(Galton 1882: 228-229)。

ゴルトンは写真の合成を人間の記憶と類比的なものとみなし

ていた。「脳には記憶を混ぜ合わせる能力が備わっている」。たとえば、訪れたことのない地方の山や湖の画像を見て、それがよく見知った別の場所のものだと感ずることがしばしばある。あるいは芸術家のような「視覚化する能力すなわち心の目で非常に鮮明なイメージを見る能力の優れた人びと」は、記憶を混ぜ合わせ合成する能力に長けており、「だれか個人の模写ではなく、類 (class) の特徴的容貌を表す形態を創造する大きな能力をもつこと」[Galton 1883: 349-350]。心の目で見られたひとつの心像は合成写真のひとつの要素にみ立てられるのであり、画像による統計は心的能力のモデルとなる。マイブリッジの発見は慣習的表象と実体の齟齬を明らかにするものだったが、この齟齬は心的能力のプロセスと関連づけられる。

ゴルトンはマイブリッジによる二〇枚の連続写真に特別な操作を施した合成を試みる(図表5下)。

私自身の観察から四本の脚を同時に見るのは難しいということがわかり、またマイブリッジ氏の写真によれば運動全体の四分の一のあいだは前脚二本が伸ばされており、別の四分の一のあいだは後脚二本が同時に伸ばされているということがわかったので、それぞれの写真のグループを別々に合成した。次にそれら合成写真をふたつに切り、前者の前半分と後者の後半分を結合した。そうしたら慣習的な姿勢とほとんど等価なもののがえられた。[Galton 1908: 263-264]

ここから類推して、脳による表象形成過程について、まったく素朴ではあるが次のような結論が導かれる。これは慣習的表象がなごく疑われることなく通用してきたことの理由とされる。

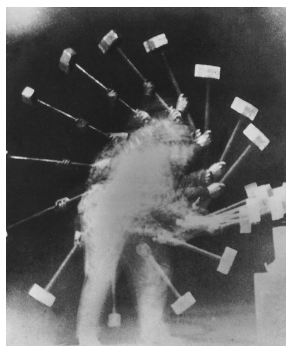
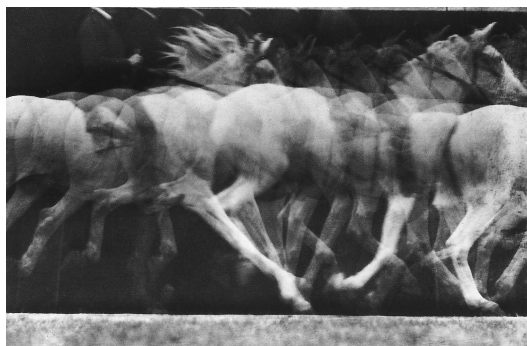
脳は、疾駆状態にあるもののなかに見るすべてのものの半分を見落としてしまう。あまりに混乱していて判別できないのである。そして、見落とさなかった半分をふたつの部分に分割し、そしてそのふたつから不合

理なひとつの全体を合成するのだ。[Galton 1908: 263 - 264]

このような考えかたが現在から見てもそれほど正確であるかはいまは問わないでおくが、実体と表象のあいだの変換加工過程についての思考が、フロイトに先だって「控えの間」と「謁見の間」からなるとされる独自の心的装置論と実験心理学へと、まっすぐつながっていくことは指摘しておこう[Galton 1883: 203 - 207; cf. Forrester 1995]。ともかくここで重要なのは、表象の属する経験論的水準と経験論的視覚では捉えられない実在の水準とのあいだの位相変換の装置として、合成写真が位置づけられているということである。高速シャッターによって動体をくまなく把握するマイブリッジの「分解」とゴルトンの「合成」は、本質的には表裏一体をなす技術だということが理解される。写真は見たままを捉えるのではない。分解にせよ合成にせよ、その操作によって映画紙のうえには、実体（実在）でも表象（仮象）でもないまったく別のもの、すなわち動体の全容、いい換えれば運動そのもの、あるいは変容そのものが定着する。変換装置のなかで運動ないし変容というものが対象化されるといい換えてもよい。

いまだ少し視覚表象の技術論を展開するなら、マイブリッジとゴルトンのあいだには、これもまた独自の⁽¹⁰⁾かたち⁽¹⁰⁾に動体を捉えるエチエンヌ・ジュール・マレーのクロノフォトグラフィが存在するといえるだろう。生理学者マレーは動体を分解すると同時に合成する。いうまでもないがクロノフォトグラフィの操作は、たとえば解体したカメラをもう一度組み立て直すといった操作とはまったく異なる結果を生みだす（図表6）。そこに姿を現わす奇怪とも魅惑的ともいえる画像は、運動によって生じるはずのことからの全体を一挙に浮き上がらせ可視化したものだ。

マイブリッジ、マレー、ゴルトンの三者は、異なる入り口から異なる角度で接近を試みているものの、本質的



ギャロップで走る馬（左）、ハンマーの一撃（右）

[Marey 1984]

図表 6 クロノフォトグラフィ

には同じ技術をつうじて世界の様相を描きだそうとしているといふことができる。われわれはこうして、個体群としての人口という実在を包囲する一連の装置として統計概念と写真技術が配置されたのだということを理解できるように思う。

姿を捉えられたもの

クロノフォトグラフィが合成肖像と類比的だということを確認しよう。つまり、クロノフォトグラフィの奇怪さと合成肖像の奇怪さは同じ種類のものである。たしかに合成肖像は世評が望むような奇怪な容貌を示していないかもしれないが、むしろその期待されたおぞましさととは別の奇怪さをたたえているというべきなのだ。なぜなら合成肖像の創りだす個体像は、個体と集団の表象関係、あるいは個体のかたちをとって析出するものとその母胎となるマスとの関係にかんする経験論を逸脱していつているのだから。合成肖像は「典型的な犯罪者」つまり犯罪者の醜悪さを定義するにいたらなかった。それどころか平凡な生活をおくっているわれわれと見分けのつかない顔をしている。だが、ゴルトンによればそれは「劣った類型に共通の人間性」の表れであった。だから、と発明家は言葉を継いでいうのだが、「合成肖像が表象するのは

犯罪者ではなく、犯罪に陥りやすい人間なのである」[Galton 1883: 333]。なるほど、それはほとんど言い訳めいて聞こえないわけではないが、しかしながらこの凡庸な像の示す「陥りやすさ」というのは立ち止まって考察するに値する。陥りやすさとは、つまり蓋然性の問題である。ここでは、すでになされたことがらとまだなされていないことがらとのあわいが問われていることに気づかないわけにはいかない。クロノフォトグラフィは——そして連続写真も——、この「すでに」と「まだ」のあわいにおかれた不分明な現実をひとつの連続した全体の構成要素としてその全体のなかに位置づけ再構成する。

そして合成肖像のなかに現われた人物は、大量現象としてある人間集団のなかでの犯罪行為にかんする「すでに」と「まだ」のあわいという曖昧模糊とした、存在にいたらずにとどまる現実を体现する。マスのなかでのこの曖昧さ、とりとめのない移ろいやすさが肖像の凡庸さの内実であり、この凡庸さは典型とか平均像のそれとは異なるものだ。それはマスのなかに存在する人間たちに分有される「陥りやすさ」の凡庸さである。これが合成肖像に「全体化」される個体群における変異の総体であろう。そこは、マスとしての人間の犯罪に陥りやすいという心的能力が可視的なものとして姿を現わす場所になるはずだった。映画の時代になってからベンヤミンが視覚経験の変容のもたらす社会的意味について述べたことがらは、おおむね合成肖像にも当てはまるように思われる。「明らかに、カメラに語りかける自然は、肉眼に語りかける自然とはちがう。なにより異なる点は、人間の意識によって浸透された空間に代わって、無意識に浸透された空間が現出することである。〔……〕精神分析によって無意識の衝動を知るように、ぼくらはカメラによってはじめて無意識の視覚を体験する」[ベンヤミン一九九四、九九頁]。

だから、これら写真をもちいた技術が可視化しようとする共通の対象をこう名指してもいいだろう。全体のなかにおける運動、変化、変異の諸相。あるいはそうした諸相からなる抽象的なものとしての「全体」そのもの。

個体の変異をつうじて種（集団）というものを画定していくこと。すでに見たようにゴルトンは合成肖像を「画像による統計」と呼んだのだが、それはたんなる比喩ではないということが理解されよう。

ケトレの平均人が集団の認識をもたらずのは、すでに述べたように、個体群のどの個体も平均からの偶発的変異であり、かかる個体が存在しうるのは平均との関係のなかにおいてでしかないからであった。そこでは統計は集団という実在から経験論的不純物を除去して真の実在——こういったよければ集団のアイデンティティ——を抽出する操作として働くだろう。ようするに平均人が目指すのは集団の「純化」なのである。だが、いかにゴルトンがケトレを意識して出発点を選んでいたとしても、統計概念の練り上げにおいてそうであったように、合成肖像においてもケトレ的思考からの離脱がはじまっているということを見取しなければならない。合成肖像においておこなわれている統計的操作を一言でいえば、それは純化というよりはむしろ、その名が表すとおり多重化であり「凝集」なのだ。

ところで、合成肖像の研究がその後も広汎な実用にもつて続けられたとしても、犯罪者の特定や犯罪の予防といった有意味な効果をもたらしたかどうか疑わしいということを確認したうえでいえば、その目的はチェーズ・ロンブローゾの犯罪人類学に引き継がれて一定の実現を見たということが可能であろう（Pick 1989: ch. 5）。彼の『犯罪人論』（初版一八七六年）は膨大な著作だが、その本体は同様に膨大な犯罪者の顔写真を収めた図版集にあるように思われる。そのなかに合成写真の応用例を見ることができ（図表7）。けれどもトリノの法医学者とゴルトンの関係は一般にはそう近くはない。むしろ、「真に正常な人は文学者でもなく学者でもない働いて食べる人」「ロンブローゾ 一九八二、三〇頁」であり、天才は狂気の一種であるとみなす説は、ゴルトンとは相容れない。しかしそうした社会的な正常と異常をめぐる命題レベルの対立とは別に、命題の成り立ちを支える問題設定においては多くを共有しているように思われる。着目したいのは問題設定の中心をなす「生来性犯罪者



[Lombroso 1895 b]

図表7 合成写真による犯罪者の頭蓋骨（左、中）と生来性犯罪者ミスデア（右）

「(criminel-ne)」という概念である。「凝集」の意味は犯罪人類学の概念を経由すればいっそう明瞭に理解できるだろう。

われわれの暮らす人間社会のなかには、先祖返り (atavisme) によってわれわれ人類と同一とはいえないほど変質しており、もはやひとつの変種とみなさないわけにはいかなかった一群の人間が混在しているとロンブローゾは主張する。かくも退行した人間は意思とは無関係にその自然性向によって現生社会の秩序に反せざるをえない（原始社会あるいは類人猿社会においては正常でありうる）。こうして犯された犯罪については、主体的意思に照準する刑法体系は的外なものではない。なぜならその者は自然的かつ必然的に犯罪を犯すのであり、なしたことがらに道徳的に責任があるとはいえないのだから。したがって照準は犯罪という行為の結果それ自体ではなく、犯罪者の人間性（人間たる資格）に当てられるべきであり、刑罰は社会が犯罪者に対しても自己防衛の権利にもとづくべきである。このようにして生来性犯罪者の観念から刑事責任と刑罰についての新しい考えかたが生まれ出てきたことは周知のとおりである。ここで焦眉の課題は、生来性犯罪者つまり太古の野蛮ないし獣性の魘りである異常な人間を正常な人間から弁別することであり、それはおもに観相学的な枠組みのなかで行なわれる。これが合

成肖像の企図と同じ文脈に属しているのを見るのはたやすい。

しかし生来性犯罪者という全体のかなめをなす概念は明確に規定されてはいない。むしろ、当時より繰り返し指摘され批判されてきたように、判別の決め手となる「徴候 (stigmata)」が際限なく「発見」されていき (多くの研究者が協力した)、しかもその解釈はかなり恣意的に行なわれ、概念としてほとんど意味を失わんばかりである。だがそれら徴候がために拾い出されたわけではなく、反復説の枠組みにそって動物、野蛮人、文明人の子供に顕著な特徴から系統的に見いだされていたということは確認されなくてはならない「グールド一九八七、第五章」。身体的徴候は次のようである。頭蓋容量の過剰と過少、後頭部中央のくぼみ、突出した下顎、大きな眉隆起、強大な頬骨、後退した額、大きくて不格好な耳、鷲鼻、つながった眉毛、薄いひげなどの頭蓋と顔面の歪みや異常。猿のように胴体に比して長い腕、ものを掴むのに都合のよいかたちをした足の親指など身体構造の異常……。心的徴候は次のようである。減退した痛覚 (そのため入墨の傾向が大きい)、羞恥心の欠如 (赤面しない)、残虐、軽率、怠惰、虚言癖、虚荣心、迷信深さ、猥褻や自慰に耽る傾向、アルコール中毒、賭博、隠語の使用、擬声語や擬人法の多用……。現在このような羅列に真面目にとりあうのは愚かしい。しかし、おそらくこの議論の問題設定の焦点は別のところにある。

高名な知識人たちは私に反論してこう述べた。「あなたは推論のなかで独立した事実を濫用した。たとえばあなたは、非対称な頭蓋骨や離れた耳などを患者に見いだしたとき、性急にもそこから狂気や犯罪を結論する。だが、それらの特徴と異常との関係は直接的でも確実でもない」。(……) 私はいいたい。私にとっては独立した異常は指標であり、ひとつの音符にはかならない。その音符が他の身体的ないしは道徳的な音符と結合していることを確認した後にそれが和音をなすと私はまさしく主張するのである「……」。(Lombroso

1895 a : tome I, viii – ix]

正論を述べた「高名な知識人たち」とは、おもにはタルドラ環境説に立つフランスの社会学派の人びとを指している。ともかく、生来性犯罪者を中心にもつこの問題設定はキュヴィエ流の相関原理に支えを求めているといつてよい。相関概念の用法が正当であるかどうかには異論があるだろう。そして、いうまでもなく刑事政策的には個々の個体の経験論的な特徴が問題になるほかはない。けれども、生来性犯罪者の概念それ自体は経験論的特徴のパッチワークで構成されるのではない。そうではなくて、それら経験論的水準の事象（音符）を結びつけ、それら事象の連関にたいして特別な意味を付与する別の水準（和音）にこそ、その本体が求められる。

フーコーは以上のようなロンブローゾの犯罪人類学を一方で念頭におきながら、このような問題設定においては異常な個人の出現を根拠づける「背後の実体」が問題にされているのだと指摘する[Foucault 1999 : 295 – 297 ; cf. id. 1997 : 213 – 235]。異常者の背後にひそむ実体は生得的なものと獲得的なものと現在われわれが区別している多様な要素からなる事象の「無制限な因果論的放縦」によって成り立つ「遺伝の網目状連関」のなかに定位している。そのような背後の実体は、具体的には「両親の身体であり、祖先の身体であり、遺伝の身体」として問題化されるだろう。

写真を合成するゴルトン。膨大な写真のうえに徴候を指摘しつづけるロンブローゾ。なるほど、彼らを動機づけるのはあまり根拠のない幻想的な恐怖であるかもしれない。それは得体のしれない群集を前にしたエスタブリッシュメントの恐怖と似ていなくはない。しかし彼らはたしかに標的を発見したのだとはいえるだろう。写真に写っているのは経験論的な個体ではない。そうではなくて人口集団そのものとしての遺伝であり、遺伝の論理空間のなかで展開される潜勢性なのである。⁽¹¹⁾

三 優生学の視点

優生学は、人口にたいする問い——繰り返し強調すれば個体と集団の関係についての問い——に坎する以上のような展開と同時に誕生したのだった。『人間の能力とその発達についての研究』（一八八三年）でのゴルトンの新造語が指し示すことからは、人口に介入し操作する技術のことであるとあらためて確認しなくてはならないだろうか。それは容易に看取れるように社会防衛という視点からの操作である。だが注意しなくてはならないが、ゴルトン以降実践に移される多くの優生的試みがそうであったように純粹志向である必要はかならずしもない。それどころかゴルトンは純化によって人口を防衛するのは困難だと考えるだろう。

「……」高度に飼育された動物の無限の改良を抑制する原因は数多くまた絶対的なものである。／まず最初に体制の脆弱さが亢進するということがある。ほんの数世代の後に、四肢と体構造はますます繊細になり、ついには虚弱になってしまう。過剰飼育された動物にはほとんどスタミナがない。その意味ではそれらの動物は、第一級の競走馬から生まれたものがしばしばそうであるように「ひよろひよろ馬」のようである。各個人は膨大な数にのぼる多種多様な有機的要素の所産である。それはちやうどある国民が諸個人からなる膨大な数のカースト——各カーストが固有の職業を独占している——の所産であるのと同様である。多くのつつまじやかなカースト——パン焼き職人、レンガ積み職人、木樵など——をなくしてしまえば、国民はほとんど破滅してしまうだろう。これが高度な飼育で行なわれていることである。「……」／次の困難は高度に

飼育された動物における繁殖力の減退にある。〔……〕／容易に理解されるように、これらの困難は、われわれに都合のよいようにつがわすことができ、また都合のよいときに殺すことのできる動植物の場合でもきわめて恐るべきもののだから、高度に選択された人間の種族を維持することは不可能になるだろう。[Galton 1883: 306-307]

優生学の出発点においてこうした視点が基調をなしていたことの意味を今日のわれわれは見落としてはならないだろう。第一節で確認したように、遺伝の統計的研究から明らかになったのは、人口はその構造からしてむしろ一定の変異の幅がなければ未来の天才を産出しえず、またその生まれ出てくる天才は多分に別の帯域からやってくるということだった。つまり、多様な要素のプールを確保することが人口の操作の前提条件なのである。

したがってこの視点からは当然の帰結として、外国からの移民を受け入れることの効用が認められるだろう。

確実な裏づけにもとづいているとはいいたいだが、ゴルトンによれば「亡命者は全体的にいつて例外的に活力に富んだ性質の人間であり、とりわけこのような人びとから新しい血統の種族が生じてくる可能性が高い」[Galton 1883: 307-308]。たとえば「たしかに選択の結果できあがった亜種族」であるユグノーとイギリス国民の祖先とのあいだに生じた雑種は「不思議なほど成功した混血種であった」[Galton 1893: 38; 邦訳上巻、二九頁]。だから「多く世代をつうじてとくに望ましい亡命者に限ってこれを誘引し、それをわが国に永住させ、その子孫を同化させる」ことが称揚される。じっさいあらゆる国における拔群人の大部分が外国からの政治亡命者の子孫である⁽¹²⁾といえ優生学者は述べる [Galton 1893: 412-413; 邦訳下巻、一三四—一三五頁]。

だが引用にも示唆されているように、移民や混血の相手がどのような種族であつてもよいということにはならない。たとえば、そうはつきりと言明されないけれども、ヨーロッパ人種のうち北方系と南欧系のあいだに区別

を設けるのが当時の通例であり、おそらくゴルトンもその価値観の域を出ないだろう。また、有色人種との混血が論外なのはいうまでもない。ここで移民に求められるのは「望ましい」あるいは優れた要素を人口に導き入れる個体群を「誘引し同化する」ことであって、そのような資質を画定してその徴候を個体ごとに弁別することである。

ようするに焦点は合理的な多様性の管理、そしてその安定成長への誘導にある。この多様さの合理性はどの水準に求められるだろうか。遺産の具体的メカニズムの不明な時期にはそれは「血」だとしかいようがないのかもしれないが、いずれにせよそれが人口のなかにもちこむ新たな潜在性が問題であるのちがいはない。人口集団の発現型の可能性を拓く潜勢性を制御すること。写真技術がその指標を提供する装置として期待されていたことはすでに見てきたとおりである。優生学と多元主義は、だから理論的には相反しないばかりか、多元主義があらゆる差異を許容するほどに徹底的なものでないかぎり両立しうるのであり、もつとえば相互に依拠しあう関係をもちうるだろう。たとえば、多様性を保持するために攪乱要因を排除するといったような。

「慈善は個人にかかわり、政治は国民にかかわる。優生学は両方ともに配慮する」[Galton 1908: 322]。このなげない一節は意味深長である。優生学の対象とそれへの働きかけかたを端的に示しているように思われるからである。とはいえ、優生学が上位に立つて慈善（私的なもの）と政治（公的なもの）を包括するといった優生学国家のようなものを意味するのではない。繰り返し強調するように、個人と全体の連関そのものに働きかけることが課題なのである。種族と個人を混同してはならない。「種族の滅亡が多数の人間の滅亡と等価であるかのよう」に「みなすのは「不合理」である。劣った種族をじよに滅亡させていくからといって、それは人間個体を破壊することではないというのだ」[Galton 1883: 308–309]。だからゴルトンには次のようにいえることができる。

統計的帰結と個人的帰結のあいだにしばしば混同が起こる。ある特定の結婚の効果が正確に予測されないのであれば優生学の適用は無益であると真剣に考えられているように思われる。だがそれはまちがいである。統計は、大勢のうちのある割合、¹の人びとの運命にかかわる確証を与えてくれる。これは別の言葉でいえば、各人が運命の影響を受ける蓋然性ということである。政治家の視点から見れば、生命がもつとも窮地に立たされ、個人のもつ有利さが排除されるのがどの地点であるのか、この情報で充分である。この情報をつうじて、あれこれの方策によって、どれだけ多くの望ましからざる人間あるいは望ましい人間が人口のなかに存在しうるのか知ることができる。それらの人びとの名前がAかBかCか、あるいはXかYかZであるのかは、「統計家」にとつてはまったく重要ではない——統計家という言葉は多かれ少なかれ「政治家」という言葉と等価である。[Galton 1908: 312]

優生学の思考は統計的思考そのものである。全体と個体を動かす作用点は全体でも個体でもない別のところにある。あるいは、個体をつうじて全体のリスクを調整し、全体をつうじて個体のリスクを制御する、と表現することもできる。ここに「政治」の本質的な変容を看取することが、おそらく必要だろう。

このように全体と個の結節点を対象化し操作化することが優生学的思考の核心にあるという点を確認し強調しておきたい。その結節点のことをゴルトン²は遺伝という言葉で指し示した。そう名づけられたことがらは、たとえば血統といった伝統的な概念と連続しているかのような分かりやすさにもかかわらず、まったく新しく生みだされた未知の領域なのである。そこに割りあてられた内容が本当に生得的で生物学的決定に従うのかどうか、じつは獲得的であって文化的決定によるものではないのか、という疑問はまったく正当であり、繰り返し問われなくてはならない。けれども、その正当な科学的問いかけはそれだけではことごらの深みに届かないのではないか。

重要なことがらは境界画定にあるのではなく、境界線が刻まれる土台そのもののほうにある。

もちろん、ここまで素描してきた優生学と名づけられた知のありかたがそのまま優生運動の全体を規定するとか綱領になるなどということはありえない。すでに触れたように、運動としてはむしろ逆の志向性を強くはらんで展開したのは周知である。じつさいゴルトンも優生学を運動として普及させようという段階においては、自身の人口分布論をチャールズ・ブースのロンドン貧民調査に重ね合わせて各階層の社会的価値を固定的に断定する。一九〇一年の講演「法律と通念の既存の諸条件もとで可能な人類の改良」のなかで、犯罪者やその予備軍を多くふくむ最下層の階級の慣習に詳しい人びとの共通見解として、こう述べている。

「……」すべての常習的犯罪者が寛大な監視のもとに断固として隔離され、子孫をもうける機会を絶対的に拒否されるならば、それは理にかなったことであり国にとって大きな利益となろう。そうなれば、将来の世代にとつての苦しみと悲惨の源泉が根絶され、受け容れがたい苦難が生じることもなくなるであろう。[Carlton 1909: 20]

だが、優生言説の典型といつてよいこの見解は、とくに優生学の成立をもって生じたものではなく、冒頭で述べたようにプラトンでさえもが口にする社会体にかんするひとつの自然発生的イデオロギーと見なすのがふさわしい。このような考えかたは、ゴルトンの知的営為の到達点であるがゆえのもの、というよりはむしろ、それにもかかわらず至ってしまうものである。思考回路のポテンシャルにおいてゴルトンの優生学はいわゆる優生運動を超えてゆく。こうした理論と実践の乖離は、イデオロギーに後押しされていると同時に生命（遺伝）工学の技術水準に条件づけられている。だがそれは水準の低さが阻害要因になっているという以上に、向かうべき対象の範囲や様相が水準におうじて構成され、その姿を大きく変えていくということを意味しているだろう。

というのも、上に素描を試みてきたように遺伝という概念のゆるみによって高度に現代的な概念へと練り上げられたともいえる人口は、同時に社会政策の対象でもあって、強い意味で社会的な知識と操作の領域とされてきたのであり、また現にそうだからである。⁽¹³⁾ 一般には生物学的なものと対立すると見なされる社会的なものが、その生物学的なものとじつさいにはどのような関連のもとに自律的な領域として対立を形成しているのか、自明なものと見なすことはできない。ここまですすめてきた考察が示すように、おそらく遺伝のような生物学的なものと文化的なものを分岐させる位相、すなわちその対立と親和を可能にする文化・生物学的母胎とも呼ぶべきものと社会的なものと、人口を介した複雑な共犯関係に光をあてる作業が必要になるだろう。優生学をめぐる生じる振幅は、そうした回路のなかにある。

生物学的なものと文化的なものの分割線は相対的である。一般にはそれは科学的知識の蓄積によって境界領域が精査され、その結果分割線が変動するという意味である。だが本当は、むしろそれ以上に、認識論的カテゴリーとしての両者は同じ母胎から生じてきたのであり、そして同一の作用へと収斂していくという意味において、そういうべきなのである。

注

- (1) 本稿は拙論、宇城「二〇〇〇」と一部重複していることを断っておきたい。
- (2) ゴルトンの伝記的全体像と思想的意義についてはふたつの評伝[Forrest 1974; Gillham 2001]を参照されたい。また、日本語で読めるものでは基礎的調査のいきとどいた岡本「一九八七」が有益である。
- (3) 進化総合説以前に自然選択と遺伝の關係がどのように整合的なものとして思考されていくかという点については[Cayon 1993]が参照されるべき重要な論考である。とりわけゴルトンを主題的に扱っている第四章、第五章を参照されたい。

- (4) ゴルトンは『遺傳的天才』のなかで古代ギリシアと当時のイギリスを比較して、人口の退化について興味深い推計を行なっている。BC五三〇年からBC四三〇年までの一世紀(三世代に相当する)のあいだにアテネは自由民およそ九万人の人口のなかからペリクレス、ソクラテス、プラトン、フェイディアスなど一四人の絶群人を輩出した。この比率を現代イギリス社会からえた分布にあてはめると「アテネ種族の平均能力は少なく見積もってもほとんどわれわれより二階級近く上である——すなわちちょうどわれわれの種族がアフリカのニグロより高いぶんだけわれわれより上位にあることが分かる。〔……〕もしわれわれの種族の平均水準を一階級だけでも上げることができれば、いかに大きな変化が起こるのであるか!〔……〕現在階級Gの位置にある人びとは、国民全体の平均能力をただ一階級引き上げるだけで一七倍に増加するのである」[Galton 1869: 396-399; 邦訳下巻、二二二-二二五頁]。
- (5) ケトレの統計的ヴィジョン、ケトレとゴルトンの系譜関係(ないしは対立関係)、さらには統計的世界観全般については多くの研究が蓄積されている。さしあたりPorter [1986]、Stigler [1986]、Hacking [1990]、Destrotes [1993]を参照のこと。
- (6) スウィートビー実験にはいくつか手続上の不備が指摘されている[cf. Gilman 2001: 205]。ひとつはスウィートビーがグループを越えて交雑していないという保証がないということ。そしてグループ分けが豆の重さによっており、「血統」を考慮に入れていないこと。これらの欠陥から「先祖返り」は当然の結果だという疑いがある。
- また、以下に記述する「回帰」の概念については安藤「一九九七」が数学的な側面から詳細に検討している。とくに第一章。この点について本稿では検討することができなかった。
- (7) この問題は射程の長い重要問題である。一見遠いように見えるけれども、たとえばアルチュセールがエンゲルスの力の平行四辺形問題(上部構造と土台の關係)を論じたことも通底する(アルチュセール「一九九四」を参照せよ)。だが、残念ながら詳しい検討は本稿の範囲を越えている。
- (8) 人体測定研究所で収集されたデータは身長のほかには体重、座高、握力、牽引力、肺活量、聴力、視力、色覚など一七項目にわたる。
- 人間にかかわるデータを検討するにあたって、自家受精するスウィートビー実験では免れえた性別に起因する困難が存在する。つまり、男親と女親の身長を単純に比較できないこと、そして性選択の影響である。男女の身長差は数量的に相殺してもよいものなのか、それとも身長差になにか意味があるのか。ゴルトンはデータを子細に検討してそれらが子の身長に影響

響を与えないと考え、母親の身長を一・〇八倍したうえで男親との平均を取り、両親を「中間親 (midparent)」に還元することで解決した。けれどもあらためて考え直してみれば、これらの問題が影響をあたえないといってしまうのか、かなり疑わしい。

- (9) 変質の徴候を身体のおえに読み取ろうとする一九世紀後半の思潮を包括的に検討するピック [Pick 1989] が全体の見通しをつけるには有益である。

また本稿ではとりあげることができなかったが、ゴルトンの指紋研究をこの流れに関連づけることもできる。ギンズブルグ「一九八八」はその方向で考察を加えている。また、アルフォンス・ベルティヨンに焦点をあてて個性の問題を考察する渡辺「一九九三」も参照されたい。

- (10) マレーについては日本語で読めるものとして松浦「二〇〇一」がある。さらに、本稿の問題関心により近いブラウン [Braun 1992] をも参照されたい。運動の解析は優生学と統計の文脈を越えてティラー主義や労働科学の動作研究と身体管理という線につながっていくということが、『機械化の文化史』のギーディオンの指摘以来ラビンバックら (Rabinbach 1992; Braun 1992: ch. 8) によって考察されている。この点については稿を改めて論じたいと思う。

- (11) もちろんロンブローゾは生来性犯罪者を経験論的に実在する個人として同定するという不可能事を望んでおり、ここで述べたようにには経験論の水準と遺伝の潜勢の現実の水準を分離して考えているのではないことは記しておかなければならない。だが、生来性犯罪者の体現するような異常が顕在化しないようにコントロールし、また顕在化してしまった場合には隔離して、社会を正常状態に保存することが新派刑法の主眼であることを考えれば、生来性犯罪者とは現実には穿たれた特異点、すなわちふたつの水準が交差する点 (操作子) として扱われているといつてよい。

- (12) ユグノーの「血」を高く評価する一方で、しかしフランス革命を逃れてきた亡命者たちについては「一般に貧弱な素質しかない」、「現代のイギリス国民に」ほとんどなんの痕跡もとめていない」としている点は興味深いかもしれない。クエーカー教徒の家に生まれたゴルトンには、しかし宗教全般にきわめて懐疑的であった。

- (13) よく知られているように優生運動の出発点をなしたのは一九〇四年に開かれた第一回イギリス社会学会でのゴルトンの講演「優生学。その定義、射程および目標」 [Gallton 1909: 35-37] であり、社会学会は初期の優生運動に拠点のひとつを提供した (米本ほか「二〇〇〇」を参照)。もちろん前世紀初頭のイギリス社会学と、生物学主義と手を切った現代の社会学では、そ

のおかれている理論的・歴史的状況が大きく異なるのはいうまでもない。けれども、それをもってこの起源を等閑に付してよいということにはならない。

参考文献

- アルチュセール、ルイ一九九四（一九六五）『マルクスのために』（河野健二ほか訳）平凡社ライブラリー。
- 安藤洋美一九九七『多変量解析の歴史』現代数学社。
- ベンヤミン、ヴァルター一九九四（一九三五）「複製技術の時代における芸術作品」『ボードレー』（野村修編訳）岩波文庫。
- Braun, Martha 1992. *Picturing time*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Desrosières, Alain 1993. *La politique des grands nombres*. Paris : La Découverte.
- ダーウィン、チャールズ一九七九（一八七一）「人類の起原」（今西錦司責任編集、池田次郎・伊谷純一郎訳）中央公論社。
- Fergus, W. and G. F. Rodwell 1874. On a series of measurements for statistical purposes recently made at Marlborough College. *Journal of the Anthropological Institute* 4.
- Forrest, Derek. W. 1974. *Francis Galton : the life and work of a Victorian genius*. New York : Taplinger.
- 1995. Francis Galton (1822 – 1911). In Ray Fuller (ed.), *Seven pioneers of psychology*. London : Routledge.
- Fourcault, Michel 1997. «Il faut défendre la société». Paris : Gallimard/Seuil.
- 1999. *Les anormaux*. Paris : Gallimard/Seuil.
- Galton, Francis 1892. *Hereditary genius*. 2nd ed. London : Macmillan. 『天才と遺伝』（甘粕石介訳）岩波文庫、一九三五。
- 1883. *Inquiries into human faculty and its development*. London : Macmillan.
- 1889. *Natural inheritance*. London : Macmillan.
- 1908. *Memories of my life*. 2nd ed. London : Methuen.
- 1874 a. Proposal to apply for anthropological statistics form schools. *Journal of the Anthropological Institute* 3.
- 1874 b. Notes on the Marlborough School statistics. *Journal of the Anthropological Institute* 4.
- 1877 a. Typical law of heredity. *Nature* XV.

- 1877 b. Address to the Department of Anthropology. Section D. Biology of British Association. *Nature* XVI.
- 1882. Conventional representation of the horse in motion. *Nature* XXVI.
- 1885. Regression towards mediocrity in hereditary stature. *Journal of the Anthropological Institute* 15.
- 1909. *Essays in eugenics*. London : Eugenics Education Society.
- Gayon, Jean 1992. *Darwin et l'après-Darwin*. Paris : Klincksieck.
- Gillham, Nicholas W. 2001. *A life of Sir Francis Galton*. Oxford : Oxford University Press.
- ギンズブルグ・カルロ 一九八八 (一九八六) 『徴候』『神話・寓意・徴候』(竹山博英訳) せりか書房。
- グールド・ステイヴン 一九八七 (一九七七) 『個体発生と系統発生』(仁木帝都・渡辺政隆訳) 工作舎。
- Hacking, Ian 1990. *The taming of chance*. Cambridge : Cambridge University Press. 『偶然を飼い飼いならず』(石原英樹・重田園江訳) 木鐸社、一九九九。
- ロンブローゾ・チェーザレ 一九八二 (一八六四) 『天才論』(辻潤訳)、『辻潤全集』第五巻、五月書房。
- Lombroso, Cesare 1895 a. *L'homme criminel*. 2 vols. 2^e éd. Paris : Alcan.
- 1895 b. *L'homme criminel*. Atlas. 2^e éd. Paris : Alcan.
- Marey, Etienne-Jules (éd. Michel Frizot) 1984. *Etienne-Jules Marey*. Paris : Centre national de la photographie.
- 松浦寿輝 二〇〇一 『表象と倒錯』 筑摩書房。
- Muybridge, Eadweard 1985. *Horses and other animals in motion*. New York : Dover.
- 岡本春 一九八七 『フランシス・ゴールトンの研究』ナカニシヤ出版。
- Pick, Daniel 1989. *Faces of degeneration*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Porter, Theodore. M. 1986. *The rise of statistical thinking 1820 - 1900*. Princeton : Princeton University Press. 『統計学と社会認識』(長屋政勝ほか訳) 梓出版、一九九五。
- Stigler, Stephen 1986. *The history of statistics*. Cambridge, Mass : Belknap Press of Harvard University Press.
- Rabinbach, Anson 1992. *The human motor*. Berkeley : University of California Press.
- 宇城輝人 二〇〇〇 『退行と回帰のあいだ』阪上孝・上野成利編『人文・社会科学と自然科学の対話の試み』京都大学人文科学研

究所。

渡辺公三 一九九三「顔をてらす光・顔にさす影」『省察』第五号。

ワイルド、オスカー 一九六七（一九九二）『ドリアン・グレイの肖像』（福田恆存訳）新潮文庫。

米本昌平ほか 二〇〇〇『優生学と人間社会』講談社現代新書。

※図表の作成には上野成利さんのご協力をいただいた。記して感謝したい。